

## 南海道地震津波の記録

## 「海が吠えた日」より

五十年前をふりかえって

川長 田中 知世

今年も十二月二十一日がま近かです。五十年過ぎし今も恐ろしかった津波の惨事がまざまざと目に浮かびます。私はその時十七歳でした。

朝方の眠むたい時刻で夢うつつ、あー地震やーと目はいいたけど起き上がりもせず、もう止むかと思っていたら、ますます揺れがひどくなります。

そのころ未だ天井板も張ってない納屋の二階が気にいって、私の部屋にしています。父が仕事の合間に天井板を張ってくれるつもりで、木材を梁に渡して上げてあったのが、ドタンバタンと落ちて来るし、布団をかぶって小さくなっていると、下から父が大声で、「この大きな地震に何しよんや早よう下りて来い」となるので飛び起きました。階段はミシミシ揺れるし、足はすくんで動かれずモタモタしていると、父が中途まで上がって来て、私を引きずるようにして下ろしてくれました。「こんな大きな地震やと津波が来るか分からん」と母が言うので、「チイは早よう逃げ！」「ぞうりをはいて早よう早よう」と両親にせきたてられて外に出ましたが、津波やったら家が流されてしまうのやらか、何か持っていかなと思ひ、部屋にもどると、宵の家

内中の洗濯物がたたんであり、大あわてでそれをひっくりかえり、それだけ持って飛び出しました。

道々人の波に押されるように暗い山道を手さぐりで。誰かさんのちようちんの薄明かりを頼りに、夢中で坂を上がって波の怖さも知らずに逃げました。師走の寒さはちつとも感じませんでした。

やがて東の空もあからむころ、そろそろ下りかける人の後について、私も両親どこやらかと恐る恐るお寺まで下りてみると、「お母やん、お母やん」と泣く子やら、じいやん、ばあやんと呼ぶ声、沖より引返して来たお父さんたちが、奥さんや子供の名前を呼んで家族を捜すのに大騒動です。私も半泣きになって両親を捜してうろうろしていました。

庭で焚火をしているので行ってみると、濡れた人たちが大勢火を囲んでオツシャイ・ヘツシャイです。その中に両親を見つけた時の嬉しかったこと、「お母やん」と飛びついていけば、母もびっくりして、「どこにおったん、早ようあたらししてもらい」と中にひっぱりこんでくれました。「おったか、おったか」と父は私の肩を抱いて自分の胸で風の垣をしてくれたものです。

火にあたりながら、沖から引返して来たおっちゃんの話によると、「今日は潮の流れがむちゃくちゃ早いな、おかしいな」と言いながらふと島の方を見ると山に火があちちもこっちも見えるし、その火が上に上に登っていくので、これはただごとではないと引返して来たんや」と言っておりました。

後で気がつけば、母の着物は火に焦げてぼろぼろ、私が初めて縫った本身の袴だったので、縞柄や色は今も忘れません。戦後一年経っていてもまだ食物も十分でなかったので、私の出た後も両親は、米麦はもちろん押し入れの梅